【新潟】静養で訪れた父島にあった「医師募集」の張り紙が転機に-野沢有二・Omni Color Opus代表に聞く◆Vol.2

専門の異なる医師と学び合い、総合診療の素養培う

2025年11月17日 (月)配信 m3.com地域版

12年にわたって佐渡市で診療し、新潟市では医療のほか介護事業も行う「Omni Color Opus」代表の野沢有二氏。若手時代は整形外科医として手術に明け暮れたが、やがて病気の予防と全人的医療の重要性を感じるようになる。そして、静養で訪れた父島の小笠原村診療所で見つけた医師募集の張り紙。「ここでなら、もやもやを晴らせるかもしれない」。新潟市で個人病院を営んでいた父に憧れた子どもの頃から、現在の活動につながる転機をたどった。（2025年10月2日オンラインインタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回はこちら
▼第3回はこちら

野沢有二氏

――野沢先生は2000年に埼玉医科大学を卒業しました。医師を目指したのは、新潟市で開業していたお父さまに影響を受けたのでしょうか。

そうですね。母方の祖父を含めて医師家系だったので、身近に医師がいなければこの道は考えなかったかもしれません。とりわけ、父には影響を受けたと思います。父は私と同じ整形外科医であり、個人病院を運営して手術も行っていました。時間外でも患者さんから訴えがあれば診療するなど献身的に対応しており、「身近なかかりつけ医」といった存在でした。子どもの頃に病院に行くと入院患者さんがいて、よく父に相談していました。そんな場面を見るにつれて、「何でもやる父、治せる父」に誇らしさを感じるようになったのです。

医師ならびに整形外科医を選んだのは、私自身の特性も影響したと思います。私は子どもの頃から工作や壊れた物を直すのがとても好きでした。電気製品などを自分なりに工夫して動けるようにしたり、拾ったバイクを解体して動くようにしたり。中学時代は集団行動が苦手だったこともあって、よく家で作業に熱中していました。

1日に4件の手術、武蔵野総合病院では部長も担う

――大学卒業後は、埼玉県の武蔵野総合病院や千葉県の亀田総合病院などに勤めます。

若手時代は手術に明け暮れました。若さゆえ、自分の手技を高めるのが面白くて。急性期病院に勤務していた頃は骨折患者さんがどんどん救急搬送されてきて、大腿骨骨折の手術を1日に4件もこなす、といったこともありました。中でも2006年から2年間勤めた亀田総合病院は全国から志のある若い医師が集まっており、診療科の垣根を越えて重症外傷患者さんを一緒に治療できたことは良い経験です。2009年には武蔵野総合病院で整形外科部長も務めさせていただきました。

しかし、手術を重ねる中で問題意識も浮かぶようになりました。医師として治療すること自体は面白いのですが、日本の医療や患者さんの健康寿命の延伸を考えると、そもそも骨折が起きないようにする予防が重要です。先進国では骨粗しょう症による大腿骨骨折患者数の増加が鈍化してきたというデータもありますが、日本は高齢者の増加と骨粗しょう症治療の啓発が十分でないこともあり、患者数は今なお増加傾向にあると言われています。

「医師としてこのままの人生でいいのだろうか」

――先生が運営する「こばり坂クリニック」のホームページによると、勤務医時代から全人的医療に関心があったとのこと。先ほど挙げた経験から生まれたのでしょうか。

それも含めて、複数の経験から関心が高まりました。勤務医時代、ある内科の先生の言葉を院内で聞いたんです。「俺が患者の腎臓を守ろうとしているのに、整形外科医が痛み止めを出すから……」。机に書類がうず高く積まれていたため、近くに私がいたことに気付かなかったのでしょう。私にとってはちくりとする言葉でしたが、とはいえ実際に内科の知識がないまま、つまり鎮痛薬が腎機能に悪影響を与えるリスクがあることを把握していない整形外科医が、そのような処方をする可能性はあります。

加えて、2010年ごろに、全人的医療を掲げてがんのターミナル患者さんを積極的に受け入れていた病院にアルバイトで勤めた時も考えさせられるものがありました。専門分化が進む医療の世界に身を置く中、「整形外科の診療だけで、医師としてこのままの人生でいいのだろうか」と自問するようになりました。

――2011年から東京都の小笠原村診療所に勤務したのは、そんな問題意識が背景にあったのですね。

ご縁に恵まれたのだと思います。私は2011年、それまでのハードワークも影響したのか体調を崩しました。「少し体を休めよう」と思って静養に行ったのが、小笠原村父島でした。本土と父島を結ぶ定期船は週に1度の運行のため、行くとすれば必ず1週間は休む必要があります。「静養にちょうどいいだろう」と島に渡りました。

私は海やマリンスポーツが好きなので、島に降り立つと、眼前に広がる小笠原ブルーにみとれました。宿のおかみさんにしみじみと「ここはいいところだね」と伝えて雑談を交わしていると、おかみさんから「あなた、医者なら今診療所で医者を募集しているわよ」と教わって。じゃあ、行ってみるかとその日のうちに足を運ぶと、確かに診療所の窓に「医師募集」の張り紙があります。体調が優れない今の自分、以前から医師として感じていたこと、そして、目に映る父島の風景……。「もしかしたら、自分のもやもやをここで晴らせるかもしれない」。思い立った私は本土に戻って東京都に連絡をし、面接を受けて採用されました。

不思議と島の中では医師同士が仲良くなる

――そして、父島でへき地医療に携わったことが、佐渡市での診療や医療介護連携に取り組む現在につながっていきます。

小笠原村診療所の先生方とはとても良い関係を築けました。当時は私と自治医科大学出身の先生を含めて常勤医が3人いたほか、島には本土から定期的に専門医が来ていたため、専門の異なる医師同士で学び合うことができました。私の整形外科の専門性は島では重宝され、自治医科大卒の若い先生から「教えてください」と頼まれる一方、私もその先生に内科診療などを教わりました。婦人科の先生は2カ月くらいの間隔で島に来ていましたし、眼科の先生は機器を持ち込んで白内障の手術を行っていました。

学会では基本的に同じ科の先生しかおらず、意見交換が気軽にできないことがありますが、不思議と島の中だとハードルが下がり、仲良くなりやすいんですよね。専門は違うけれど、「島を楽しめる人間」という点で一致している

からでしょうか。新しい先生が来たらその夜は歓迎の酒盛りです。「先生、こんな時どんな薬を出せばいいの？」「ああ、それはまずこの薬を出しておくと効果が出やすいよ」といった医療のエッセンスのやり取りがしやすく、父島で医療を行ったことが現在の私のベースとなっています。

父島を出る際に村の人から見送られる野沢氏

◆野沢 有二（のざわ・ゆうじ）氏

2000年埼玉医科大学卒。武蔵野総合病院や亀田総合病院の整形外科を経て、2011年に小笠原村診療所に勤務。2013年に故郷の新潟県に戻り、佐渡市で医療活動を開始。2020年から佐渡市小木診療所管理医師。新潟市でも医療・介護事業を行う。日本整形外科学会整形外科専門医。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太（写真は野沢氏提供）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索